

およそ8千年前にあった集落

国際理解
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



八千代にあった縄文時代の集落の想像図。

(想像図: 帯広百年記念館蔵: 1)

およそ8,000年前、札内川支流の売買川が始まるあたり(帯広市八千代)の少し高くなったところに、家が2~5軒、建てられていました(八千代遺跡)。

地面を、直径4~6mくらいの円形に、深さ数十cmほり下げて床にした「竪穴式住居」です(直径1mの倉庫(?)や10mの集会場(?)もありました)。(p85)

床のまん中は、たき火をする「炉」でした。

八千代ではしっかりした柱は使われず、細い木で骨組みを作り、その上を木の皮や毛皮でおおい、さらに土をかぶせて屋根としていたようです。

土地を開くために、また、家を建てる材料やたき木をとるためには木を切ります。その時には「と石」で石の表面をみがいて作った「石おの」が使われました。

八千代のメニュー

炉の周りの床には、40~50cmくらいある、平たい「台石」がおいてあります。

貯蔵用の穴にためておいたクルミやドングリをこの台石に乗せ、「たたき石」や「すり石」を使って割ったり、すりつぶしたりして下ごしらえをしました。

底が平らで深い「土器」にわき水を入れ火にかけて、木の实のアク(しぶみ)をとったり、煮炊きをしたりもしました。

あるいは、弓矢でとった動物の肉や売買川でとれた魚を火であぶったり、いろいろな材料を混ぜてねった「タネ」を、熱した石でじっくり焼き上げたりしたかも知れません。

そのほか、ヤマブドウやコクワ(サルナシ)といった、野生のくだものも、食事を豊かにしました。



八千代遺跡で見つかった木の实。 八千代遺跡のすり石と台石。



八千代遺跡の「炉」のあと、住居あとの床にあった。

(写真: 帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 3)

夏には川を下って魚とり

八千代では、おもに秋~冬の間、木の实とりや狩りをおこなって暮らしていました。

春になると売買川ぞい(あるいは帯広川ぞい)に川を下り、十勝川など大きな川に近い場所、例えば、帯広市西8条13丁目の丘のへり(暁遺跡)などに住まいをかえたようです。ここでは、春から秋にかけて、石のおもり(石錘)をつけた網を使って、川魚をとっていました。(p93)

おそらく、春にはイトウ、夏から秋にはサケが一番のえものだったことでしょう。



以前、十勝川でおこなわれていた網によるサケ漁(採卵用)。平成8年(1996)の写真。

1 帯広百年記念館(おびひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地(緑ヶ丘公園内) 電話: 0155-24-5357 月曜日休館

2 と石(といし・砥石): 石材をみがいて美しくしたり、刃物をすって切れ味をよくしたりするため(研ぐ【とぐ】ため)の石。

千年以上使われた場所 ... 八千代遺跡 (八千代A、C遺跡)

「八千代遺跡」は、帯広市平野部の南西のはし、日高山脈ふもと近くの八千代町にあります。昭和60～63年(1985～88)に発掘調査が行われました。

遺跡は、売買川最上流部(今では直線的な水路)にそってあり、帯広川の支流の始まりも近くにあります。

この遺跡では、8,000～7,500年前ころの「暁式土器」がある竪穴式住居あとが、103軒見つかりました。

といっても、同じ時期に103軒の家が建っていたわけではありません。2～数軒の家が建ち、十数人の人が暮らす集落が、人や場所を少しずつ変えながら続いてきたようです。

ほかの遺跡の竪穴式住居あとには、柱を立てた穴がよくありますが、八千代遺跡では見つかりませんでした。しっかりした柱ではなく、細い木を組み合わせて屋根の支えとしていたようです。

この遺跡で見つかった土器や石器などは、帯広百年記念館で見ることができます。



発掘された時の八千代A遺跡の全景。おくの林の中に八千代C遺跡。(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)



八千代遺跡の位置。帯広市八千代町。



発掘されていない八千代C遺跡。林の中の丘にある。右手前の細い水路が売買川上流部。

🔍 ホタテ貝のあとがある土器 ... 観察のポイント



(右)八千代遺跡の土器。底にホタテ貝のカロのあとがついている。(帯広百年記念館)



土器底のホタテ貝のカロのあと。(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

残されている遺跡と水路の流れ

八千代遺跡は、半分くらい(C遺跡)が手つかずのまま、道道216号ぞいの小高い丘に残されています。八千代神社の周りの林です。ここにも集落がありました。道路ぞいに水路があり、これが売買川です。流れは直線化されていますが、それでも、暮らしの身近に川がある生活を、想像できるのではないのでしょうか。

土器の底にはホタテ貝のあとが

八千代遺跡で見つかった土器は底が平らで、ホタテ貝のあとがついています。帯広百年記念館で確かめてみましょう。

ホタテ貝は海の貝です。海まで行ったのでしょうか？それとも、海ぞいの人と、交流があったのでしょうか？

「暁遺跡」の土器と同じ仲間

八千代遺跡で見つかった土器は、それより前に暁遺跡(帯広市: p79)で見つかった土器と同じタイプの「暁式土器」でした。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

アムール川とのつながり ... 独特なヤジリ「石刃鎌」

帯広市の「大正遺跡」や浦幌町の「浦幌新吉野台細石器遺跡」「共栄B遺跡」は、およそ7,500年前の遺跡です。今とほぼ同じ暖かさのところです。

これらの遺跡では「石刃鎌」というヤジリ（矢の先）が見つかりました。

石刃鎌は、石からうすくはがし取るという旧石器時代から伝わる技によって「石刃」という石器を作りだし、それを加工するという独特な方法で作られたヤジリです。

石刃鎌は、シベリアやモンゴルなど大陸の広いところに広がっていました。

大正遺跡などの石刃鎌やいっしょに見つかった土器、それに家のあとのようすは、大陸のアムール川ぞいの遺跡のものに似ています。

およそ7,500年前、アムール川の人たちが、サハリンを通り海をわたって、途別川や浦幌川までやって来ていたのでしょうか。



アムール川とサハリン。大正遺跡。帯広市大正町。



大正遺跡(帯広市)で見つかった石刃鎌というヤジリと石刃。



大正遺跡(帯広市)で見つかった、石刃鎌を使う文化の土器。日本の縄文土器的ではない。円内はペンダントと顔料のもと。(石器・土器の写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 1)

売買川の(?)魚の骨で、もようつけ ... 稲田1遺跡の土器の文様



稲田1遺跡で見つかった土器とその表面にあった魚の骨による文様。(帯広百年記念館埋蔵文化財センター)



サケの仲間であるヤマメ。ただし、土器の文様の魚がヤマメだったかどうかまではわかっていない。

帯広市の稲田小学校の西向かいには、「稲田の森」と呼ばれるカシワなどの林があり、そこから北へ坂を下りると売買川の流れがあります。

逆に稲田の森の南側、売買川から見ると小高くなったところには「稲田1遺跡」があります。

稲田1遺跡からは、旧石器時代から縄文時代にかけての土器や石器、落とし穴のあとなどがみつかります。

その中に、およそ6,500年前の土器がありました。その土器には、サケの仲間の骨をおしつけたもよう(文様)が入っていました。

売買川でとれた魚なのでしょうが?



稲田1遺跡の位置。帯広市西16・17条南40・41丁目。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

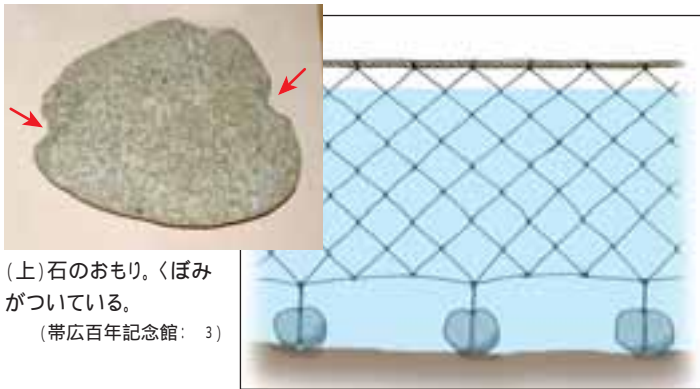
第5章 発展、今、そして未来へ

用語 さくいん

1 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひやくねんきねんかんまいぞうぶんかさいセンター):帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

2 サケの仲間(サケのなかま):サケ科の魚。サケ、ヤマメ(サクラマス)、オシロコ、アママスなど。

縄文時代の川漁 ... すでに基本は今と同じに



(上)石のおもり。くぼみがついている。
(帯広百年記念館：3)

石のおもりの使用イメージ。

縄文時代の人々にとって、サケなどの川魚は大切な食べ物でした。ですから、川での漁をさかんにおこなっていました。

豊頃町の「高木1遺跡」、浦幌町の「平和遺跡」や「下頃辺遺跡」からは、小さなくぼみがつけられた石がたくさん見つかっています。くぼみのおかげで、ひもをしばりつけやすくなっています。

これは、およそ7,500年前、川で魚をとる時に網につけられたおもり（石錘）です。

石狩市にある「紅葉山49号遺跡」では、およそ4,000年前の「エリ」という川魚をとるしかけが見つかりました。エリは、川の流れの中に木のくいの一列を作ったもので、魚をワナの方へ向かわせるしかけです。

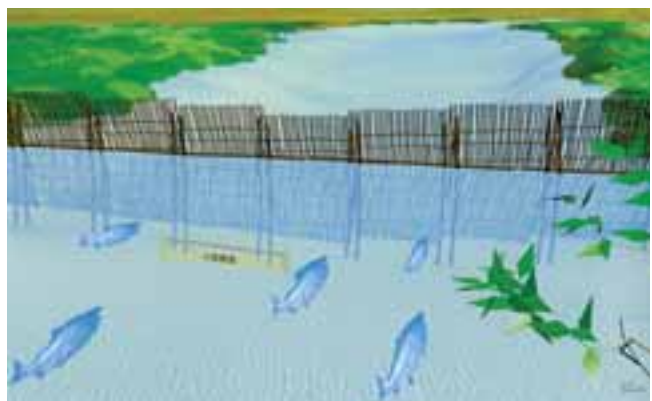
紅葉山49号遺跡のエリには、サケ・マスをとるためのものと、くいの間をヤマブドウのつるで編みこんだ、小さな魚をとるためのものがありました。

このほか、タモ網、丸木舟（一部分）、舟をこぐための櫂、魚をたたくための棒、魚をつくためのモリやヤス（石製や骨角製）、たいまつ用の道具、舟の形をした皿、すだれのように細い木がたくさんならんだもの（柵？）などが見つかり、縄文時代には今に通じる川漁がおこなわれていたことがわかりました。

残念ながら、こうしたあとは十勝では見つかりません（木の道具はふつつくさってしまう）が、同じ方法で漁がおこなわれていたのかも知れません。



紅葉山49号遺跡（石狩市）で見つかったエリのあと。木のくいが一列に並んでいる。
(写真：石狩市教育委員会蔵)



エリのイメージ。
(CGイラスト：石狩市教育委員会蔵)



チョウザメ。十勝川には昭和時代なかばまでいたという。
(浦幌町立博物館：4)

芽室町の西土狩4遺跡（およそ6,000年前）では、サケ（？）、イトウ、ウグイの仲間とともにチョウザメの骨が見つかりました。

チョウザメがここまで十勝川をのぼっていたこと、また、ウグイの仲間がマルタ（河口近くから海にすむ）らしいということから考えると、このころの十勝川河口は、かなり上流に入りこんでいたようです。

当時は今よりも暖かく、海水面が高くなっていた「縄文海進（p84）」のころでした。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

3 帯広百年記念館（おびひろひやくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155 - 24 - 5352 月曜日休館

4 浦幌町立博物館（うらぼろちようりつはくぶつかん）：浦幌町字桜町16-1（らぼろ21内）電話 015 - 576 - 2009 月曜日休館